

岩下明裕（九州大学大学院法学研究院・教授・公募研究）報告

Border Studies Today: Theoretical Development and its Role in the Contemporary World]

2018年7月22日からオーストラリアのブリスベンで国際政治学会（IPSA）の大会が行われました。7月25日午後、新学術領域研究「グローバル関係学」の酒井啓子代表が組織した「現代のグローバル危機を分析するための新しいアプローチ」というパネルで、私は「今日のボーダースタディーズ」について報告しました。

このパネルは、日本の地域研究の立場から、国際関係の西洋的理解を問い直そうとする野心的なもので、中東や南米などをフィールドとする日本人報告者とともに登壇しました。興味深いのはどの報告も単なるオーソドックスな地域研究についての報告ではなく、地域の知見をもとに新しい理論を構築しようとする志向を共有していたことでした。ともすれば、足元を重視し現場を丹念に追うことをモットーし、そうであるがゆえに、他の地域に関心を持たない研究者群が少なくないなかで、地域研究者の間でこのような「空中戦」が行われたことは画期的と言えます。

他方で「空中戦」としての議論がかみ合っていたかといえば、「関係性」をキーワードにそれぞれが持論を展開したという成果にとどまっており、今後はメタレベルで関係性や地域をつなぐ枠組の模索が火急と言えます。その意味で、政治地理学の泰斗、山崎孝史氏（大阪市大）がパネルに参加した意味は小さくなく、私たちはこれを機に、政治地理学たちがこれまで積み重ねてきた脱ウエストファリア的な国際関係にむけた議論を学ぶべきでしょう。

最後に本学会では日本人研究者のプレゼンスを大きく感じられました。これはこの学会がかつて福岡で開催されたことを契機としており、当時の現地組織者である藪野祐三氏（九州大学名誉教授）が「九大方式」と評して全員が日本人によるパネルをどんどんつくることを提唱されたことによるようです。しかしながら、当時と異なり、様々な分野においてピンで立てる日本人研究者も増えてきています。これからは欧州や南米、南アジア、ユーラシアなど地域を越えた研究者たちによる多様なパネルを、日本人研究者たちがリードしてつくっていくようになることを願っています。